

田代
著述

臺灣軍記

二

10

15

20

25

30

A 408
2

臺灣軍記二編

田代幹夫 編

再説臺灣東部の地は於て琉球藩の人民五十四名且つ
 小田縣の人民等が漂着せしを却り土蠻等之を
 残害し其肉をさへ食ひし事最も瑣末に似たる
 頗る國威に關係せり殊更方今我が航海の漸次
 盛んなるのとき向後彼の地は航する者くる兇暴の
 所為に罹り屢非命に死せん事を朝廷憂慮在せし

48-8062

則ち去稔全權大使を清國に遣はして是等の談判に
及ぼすの更なる間罪の兵を向んと陸軍中将西郷従道
を蕃地事務都督に任じ陸軍少将谷干城海軍
少将赤松則良等若干の選兵を五艘の船に分配して
明治七年四月より追々出帆し及びびし

○第一番蒸氣有功丸 十五日品川海より出帆

○第二番蒸氣大有丸 十六日朝七時同所より出帆

○第三番英國の蒸氣船(ヨークシャー) 同日十時同所出帆

○第四番美國の蒸氣船(ニウヨルク) 同日十時同所出帆

○第五番蒸氣北海丸 廿日十一時品川出帆

ルク号 十七日午後四時横濱より出帆せり
西郷都督赤松少将等七名乗船し
斯の如く五艘の船々或は兵器兵糧の類は十分
積上り次第に抜錨をす程に此月十八九日頃より
第一番船有功丸より第四番船ニウヨルク迄の追々
長崎に著港せしむるに當り西濱の町あり元薩州の
邸を以て仮に蕃地事務局とす 廿二日より廳事を
開きて大隈参議を始めしむるに西郷都督自餘の

官負日毎此廳も出頭せしむ不日臺灣へ進
發せしむの事件を爰に評議あり然るも第三番
船(ヨークミヤール号)の東京より長崎迄雇ひ入の
約束もせむ乗組の兵士のさしあり諸荷物総て
此地に揚げしなり余が臺灣進發の軍船不足及
開の五番船北海丸が横濱及び神戸邊を然るも
船を探り求め來報せむに答ありしは洋中
あり障りありらん廿五日の朝もいさむと更に入

港の帆影も見し豫ての評議に北海丸の長崎に
到着せば廈門の領事官福島九成此船に乗組
せしむ諸船に先立ち此地を發しうの臺灣に程
近き廈門の地に趣きつて這回我が邦兵を出して
罪を臺灣に問ふの事件を支那の政府に報告
せしむべき手配りをせん做ししむる彼船延着
故の事務局ありし大いも苦慮して電信をりて
神戸迄問合せ及びしし未だ彼地へ北海丸の

入港せしがその返答もむいあく、以て訝しく、廢る
る変事やありつゝんと各心を痛めし、此日の午後
一時もいづり、稍北海丸入港せり、仍て延着の仔細を
問ふ、此船廿日、品川を出し、洋中卒に烈風
起り、廿一日の昼後より、廿三日の夜に至るまで荒波の
たれ、悩まむ、四國の沖に漂ひし、此夜少く、風
治まり、浪も漸次、低く、あるも、蒸氣の火勢を強
く、頻りに船を進ませ、故廿四日の朝に至り

遙る薩州の山を見付け、夫より針路を立直して
今入港し、及び、余の件、荒波の為、水夫
一人溺死、機械も少く損せし、組の官
員、兵士等、いささか恙あり、北
九の稍、修復も、及ばざる、余程、事務局、彼
船入港、も、甚だ、機械破損、及、頻りに用、事
事、愜、ハ、仍て、有功、丸を、艦、以、厦門の領事官、福島
氏、その他、三百、余人を、乗せ、廿七日、午後、十時、

諸兵先立ち出帆せり尤も厦門も趣きて支那の
政府と談判せば早速電報もさしとあり備あり
此程入港せし北海丸も乗込て内史金井之恭東京
あり態々長崎も出張あり其故を廢りしと豫て
外國船を雇ひて出兵もささぐき苦ありしも外國の
(ミニストル)より言ひ出る趣きあり方今支那も日本も
咸我が輩の和親の國あり然るを支那の所轄の
地と境ひを交へし臺灣へ兵を向ると承りて

船を雇ひしを匡きよし斷然違背し及びしり依て
姑く出兵を延引ありて然るべき旨金井氏より
示談あり然もいも東京あり許多の兵士等出張
せし薩州の徵募兵熊本の鎮臺兵佐賀の追
討兵あんど追々此地も来りて総勢合せて三
千餘人何も屈強の壯士あり一日も早く臺灣へ
押渡らんとする時をも將士等おのけ憤懣して
事を延まら至りしとく此上外國艦を此方へ

買入まで日本号の船とせし渠等も於ても斟酌
ありとて爰も衆論決定ありん先隊の将卒
臺灣へ繰出さるべき事極まり谷赤松の兩将等
千六百餘の兵士を六日新艦孟春艦明光九三國
丸の四艘も分けつゝ相率つゝ五月二日の午後一時
長崎港を出帆ありしに大隈参議西郷都督
金井内史等諸将を送りておのゝ船も到らむるに
諸船及び砲臺あり祝砲數声放發せり斯て次の日

午後十時小大久保参議卿船も衆ト卒らば長
崎へ着港あり這ハ清國への駈引ありて這回
臺灣征討の改議ありべき為ありしが既に衆評
一定して昨日先隊の将士等ハ出帆為せし跡も
はまや期を延ばすの事ありしに仍て臺灣平
定の籌策を盡さむる爰もいあゝ然るべき
外國船を購ひ入るゝの談判も稍調ひしに遠く
らびし西郷都督の残りし兵を率つゝ當地を

進^{しん}發^{はつ}ありべきの旨^{おんせいの}令^{しやう}を諸^{しよ}軍^{ぐん}へ布^ふうせらるる備^{そなへ}も
去^き月^{げつ}廿^{にじゅう}七^{しち}日^{にち}長^{ちやう}崎^{さき}を出^{しゅつ}帆^{ぱん}せし蒸^{じやう}氣^き有^あ功^{こう}丸^{わん}船^{せん}を
程^{ほど}あ^へく厦^か門^{もん}に到^{いた}りし頃^{ころ}領^{りやう}事^じ官^{くわん}福^{ふく}島^{しま}氏^しの支^し那^なの
政^{せい}府^ふへ出^{しゅつ}兵^{へい}の條^{じょう}件^{けん}を報^{ほう}告^{こく}し及^{およ}ばしら船^{せん}を談^{だん}地^ち
を開^{ひら}帆^{ぱん}して第^{だい}一^{いち}番^{ばん}の臺^{たい}灣^{わん}へ渡^{わた}り此^{こゝ}島^{しま}の西^{せい}南^{なん}に
當^{あた}るる社^{しゃ}寮^{りやう}といふ港^{かう}に到^{いた}りて這^{こゝ}所^{ところ}に碇^{てい}泊^{ぱく}
ありし程^{ほど}に本^{ほん}月^{げつ}三^{さん}日^{にち}に長^{ちやう}崎^{さき}を出^{しゅつ}し谷^や赤^{せき}松^{しょう}兩^{りやう}將^{しやう}等^{とう}
の衆^{しゆ}組^{ぐみ}も船^{せん}々^々に追^おひ々^々此^{こゝ}地^ちに入^い港^{かう}ししをい

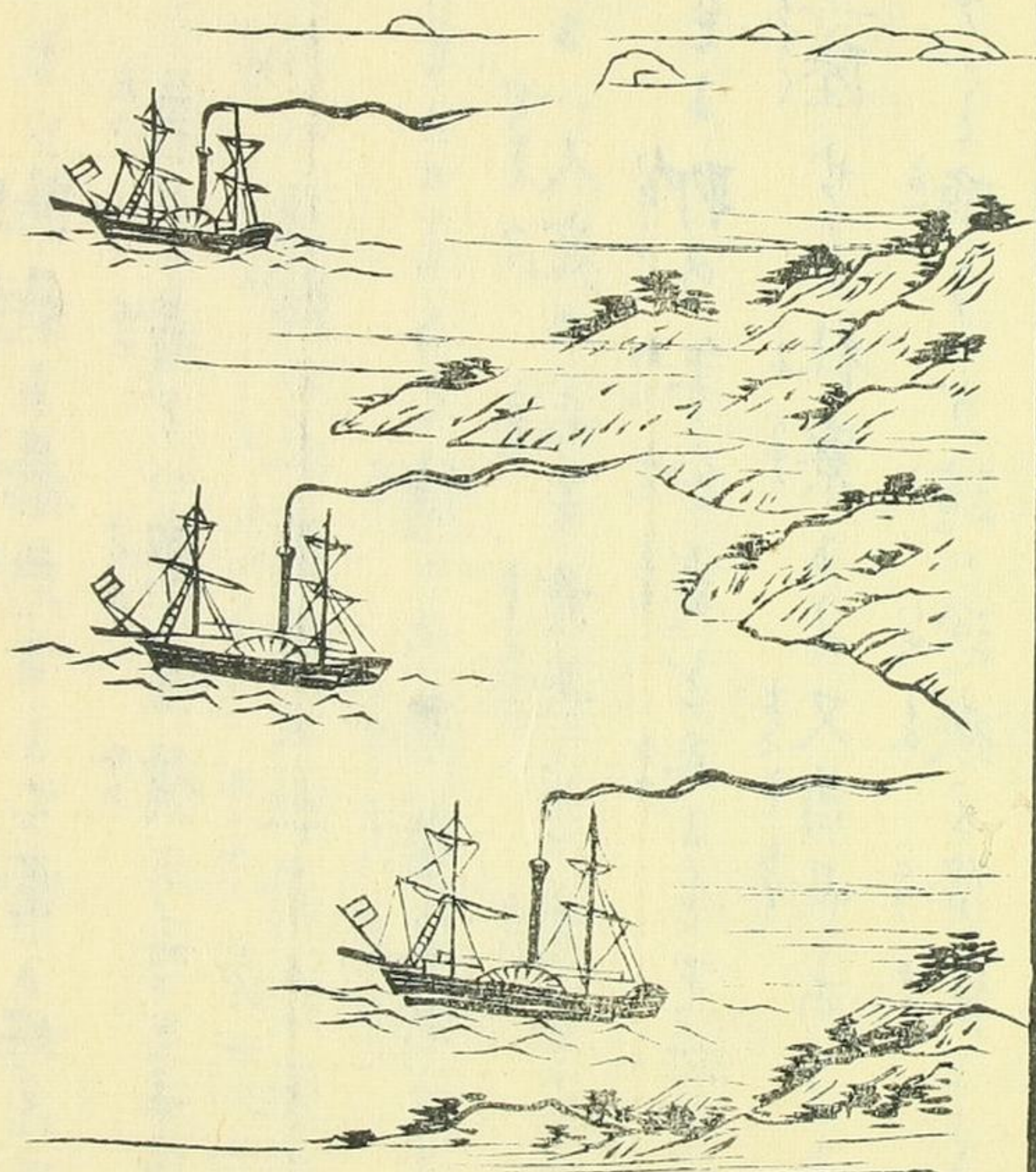
一同^{いつどう}蕃^{ばん}地^ちに上^{じやう}陸^{りく}しし船^{せん}を社^{しゃ}寮^{りやう}の海^{かい}岸^{がん}あり所^{ところ}へ
天^{てん}套^{たい}を張^{ちやう}設^{せつ}け隊^{たい}伍^ごを正^{ただ}して陣^{じん}列^{れつ}せし猛^{まう}威^い
最も盛^{さか}んぬり當^{あた}りがごとく見^みへり

一^{いつ}説^{せつ}は我^{われ}が兵^{へい}此^{こゝ}地^ちへ来^{きた}船^{せん}せしとき外^{がい}國^{こく}船^{せん}一^{いつ}艘^{そう}
来^{きた}りて俱^くに碇^{てい}泊^{ぱく}ありし其^{その}船^{せん}の甲^{かう}比^ひ丹^{たん}にて
其^{その}名^なを(カセル)と言^いつる米^{まい}利^り堅^{けん}人^{じん}我^{われ}が為^{ため}に土^ど
蕃^{ばん}等^{とう}を左^さ右^うと説^{せつ}諭^ゆあり又^{また}陣^{じん}營^{えい}を設^{せつ}るあり
あり大^{おほ}いし周^{しゅう}旋^{せん}せしと言^いふ

抑臺灣の地は於る既に前卷に言つた如く南北に
長く東西に狭く其内西部と稱する分の先年
濱田弥兵衛が彼勇名を露はせし地にてこの全
島の十分の四の今尚支那の所轄あり備あり
東部と所へし平原甚ど多くは南の方へ山低
けむと北よりくるも随つて高山峨々と連ありて
草木繁茂せざるが故に僅に土蕃の住みありと
人類ありざる如しとぞ這回兵船を向らむ

社寮の港と言つる地へ山多しむと低しといふ南の
端の所にて此海岸は平地あり南北凡四里許り
東西僅ら十三町の船形の場所ありが爰に住む
土人等を車城社寮保力庄統領埠田中央と言て
固是野蠻ありと雖も近來次第に風俗開け
支那語も通じ文字も知しなり仍て是等を熟蕃
と稱し別て車城の熟蕃中にて最も繁昌の都會
として表通の町三丁裏通りも又二丁あり人口凡

の進軍艦
圖發



四百余り町の入口に門ありて煉瓦石より其を築き一區の額を掛て福安城と題し一門を介し関帝の廟あり住僧ハ支那人あり町家の総て煉瓦にて造り屋根ハ何れも草にて葺り其他熟蕃と稱する向ハ農工商の道備りて人事を弁し之も亦あり此餘山中に住り者十八社ありて或ハ牡丹或ハ高士滑或ハ雨乃るど唱へて多々ハ無下の塾蛮あり仍て是等を生蕃と稱す就中

牡丹人種ハその性最も暴悪ニシテ常ニ好んで
鬪争を好ム一負方者をバ忽チ屠リテ其骨を
食フと言ふ余バ自餘の土蕃等ハ牡丹人の暴戾
を大いに恐むルカト云ん諸この熟蕃生蕃等も
何れも一社ハ一人宛の必キ酋長有リ者あり
土蕃等とモ聊の年分貢を為リトモ彼等
我が兵の上陸セシ社寮も又酋長あり
其名を(ミア)と喚ぶが這ハ逸疾ク降伏シ

案内者トハありシあり聞話ハ姑クおきて余程ハ
谷赤松の兩將ハ蕃地上陸してより渠カ動
静を探リ見ルハ彼の熟蕃と言ハる族ハ何れも
兵威ハ思怖シテ抗撃スルハ其の勢ハあつねど生蕃十
八社の輩ハ於テハ総テ山家に在リ故ニ其情実
を詳ラシセシト既ニ我々兵此港ニ上陸セザル
其以前日新艦あり兵士等々近傍海岸を測量
おきんと脚船ニ乗リテ那方這方と漕廻

らひとき思ひかけあき陸地より小銃四五發打
掛けし幸ひ躬方こゝろ死傷しやうありと害心がいしんありと
明らき殊こと謂い所ところ牡丹ぼたん入いの残忍ざんじん不頼ぶらんの族しゆを
人事じんじの疎そき者ものと听きり固こあり這回このたびの出陣しゅじんハ
専せんら鎮撫ちんぶを旨めいとて猥わいり兵端へいたんを閑ひままじき
御趣意ごしゆいありありと兵威へいゐを示しすもあまんば
彼の族しゆあり帰順きじゆんありはまじ就つハ牡丹ぼたんの通路つうろの
口くち陣じんを轉てんじて可かあまん左ひだりも右みぎも其地そのちの形状しやうじやう

點檢てんけんせむんん在あるべしと則すなはち五月十八日ごがつじゅうはちにち徵ちゆう
集兵しゆへいの伍長ごちやうより北川きたがわ某なにかあり者もの卒そつ一名いちめいを率りつて
頓とんて斥候しやくこうを遣つはしり仍さらて件けんの兩人ににんハ本陣ほんじんを
立出たていつ彼の車城しゃじやうの東ひがしあり山やま添そる細道さいだうを辿たどり
行く事こと三里さんり許ゆるり然しかせども人氣じんぎも見みへざむば
尚なほも委あづかり探索たんさくありきんと覺おぼへざ敵地てきちの深ふか入り
せし高草たかくさ茂さかし其裡そのうちに埋伏まいふくあり牡丹ぼたん人
等らが狙あひまありと五六ごろう發はつ不意ふいに小銃せうじゆを打掛うちかけ

たり北川到ありざらむ在るれど思ひ設る処あり
飛来りころ弾丸の急処の重傷を蒙るとも忽ち
开処の斃るを土蕃等多人数露も出直ち平
首を搔落し所持の佩刀小銃のさきあり衣服を
さき剥取りて首級と共持去りたり其とき
北川の従ひ来りて件の卒も痰を負ふるを
辛く其場を逃延て稍本陣を立取り箇様々
と報告するも諸人大いに駭きける开中薩州の

徴集兵の面々ハ何もの奮怒も堪ざりて即刻
我が輩馳向いて野蛮等残らまを殺戮せんと頻
りに喘りて已まざるを谷赤松の兩将ハ是等を
厚く慰撫ふして猥りも無謀の兵を出さば尚も
土蕃の舉動を探りて後兵を出さんと同月
廿一日も社寮の酋長(ミア)と言つるを案内者と
あつても精兵僅ら十名餘りを以前の道に進
もむ然るも土蕃等二三十人又うの高草茂りし

中より忽然として發砲せり、亦ども躬方の兵士等ハ斯くあり、つと期し、つと事、つと此とも動ずる氣色あり、土蕃が潜伏せし方ハ頻りに砲を發せし、つと忽ち一個を打斃せり、此砲勢もや駭きけん、土蕃等崩れて敗走るを、何処迄りと躬方の兵士等追ひ逼らんと為し、つとを（ニア）あり者がかし、禁めし渠等が故あり、逃去るハ尚伏兵殘設けおきて、四引寄せん、の策あり、つと言つ、固より

此日出張せしハ、撃戦あるべき為あり、つと擧動を探らん為あり、つと兵をおさめて退陣あり、つと事云々と報告せし、つと爰に於て、兩少将等會合あり、つと議せし、つとつと、つと土蕃等ハ尚斯の如く專ら野心を狭めて、殺伐をのこし、事あり、つと倫理を悟らねば、つと百方説諭を施し、つとも届くべきりのあり、つとつと、つと一回伐つて、つとを懲り、つと然して、つと後におしを諭し、つと又よ、つと是を救ふ、つとと、つと軍議決定あり、つとつと、つと

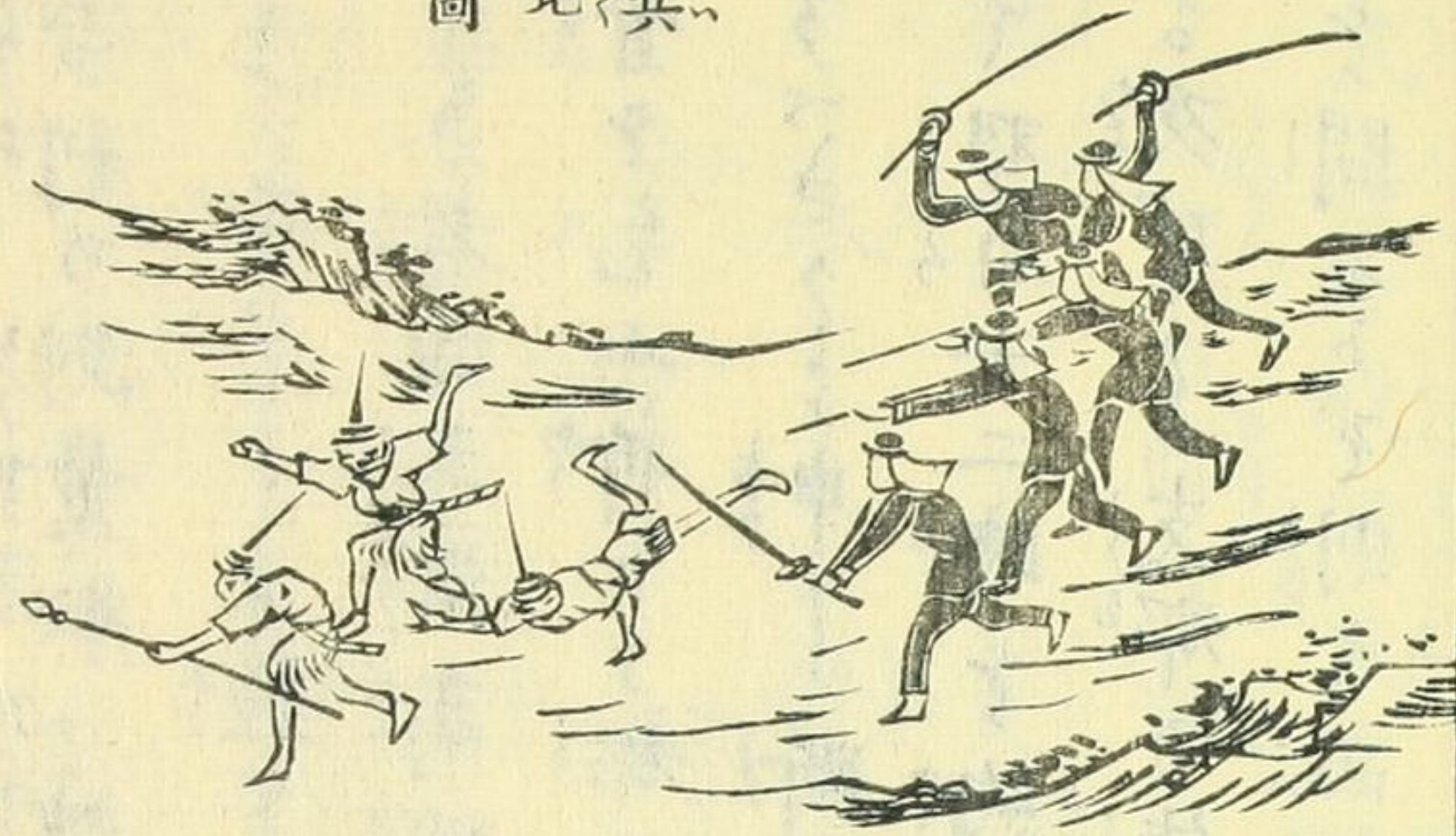
次の日(ひ)世(せ)二(に)の早(はや)天(てん)も薩(さつ)州(しゅう)の徵(あ)募(ふ)兵(へい)熊(くま)本(ほん)の鎮(ちん)臺(たい)
兵(へい)の二(に)小(せう)隊(たい)を繰(く)出(だ)し一(いつ)列(れつ)の車(くるま)城(じやう)の東(ひがし)の道(みち)より
漸(しん)次(じ)に山(やま)を登(のぼ)る事(こと)稍(さう)三(さん)里(り)とも覺(おぼ)しき頃(ころ)土(と)蕃(ばん)等(ら)
此(この)地(ち)の險(けん)岨(そ)も扱(お)りて大(たい)石(せき)を積(つ)あげつ爰(こゝ)も俄(は)に
胸(きやう)壁(へき)を築(き)き我(わ)兵(へい)の進(しん)むを俟(まち)つて彼(か)等(ら)も
胸(きやう)壁(へき)も身(み)を躲(く)けし只(ただ)首(くび)をのり露(あ)らわして顔(かほ)りも
狙(ぞ)撃(げき)も及(およ)ぶもぞ彈(だん)丸(がん)兩(らう)の如(ごと)くあり途(みち)險(けん)ありて
且(かつ)狭(せま)らむもハ剽(せう)りも進(しん)まんま我(わ)が兵(へい)多(おほ)く傷(きず)なきを

茲(こゝ)も一(いつ)策(さく)を設(お)けつ鎮(ちん)臺(たい)の一(いつ)小(せう)隊(たい)ハ山(やま)の裏(うら)手(て)も
兵(へい)を廻(まわ)し一(いつ)壯(さう)丹(たん)人(にん)等(ら)が屯(とん)せし後(うしろ)ろの一(いつ)層(そう)小(せう)高(たか)き
処(ところ)ハ辛(から)うして攀(のぼ)登(のぼ)り敵(てき)を直(ただ)下(くだ)り見(み)下(くだ)しつ
小(せう)銃(じゆう)数(かず)発(はつ)放(は)ち掛(か)せし思(おも)ひ設(お)けらぬ更(さら)も故(ゆゑ)土(と)蕃(ばん)等(ら)
大(おほ)い駭(おど)きて慌(あわ)忙(まわ)しその所(ところ)ハ豫(よ)て憤(い)懣(まん)せし処(ところ)
薩(さつ)州(しゅう)の徵(あ)募(ふ)兵(へい)ハ無(な)二(に)無(な)三(さん)も押(お)詰(つ)来(き)りて彼(か)は
胸(きやう)壁(へき)を踊(おど)り越(こ)へかろし刃(やいば)を抜(ぬ)き一(いつ)當(あた)るも任(まか)し
せし難(がた)立(た)しうハ首(くび)を砍(き)り事(こと)十(じゅう)二(に)級(きゆう)その余(あま)も多(おほ)く

残を負せしむど土蕃等忽ち敗北して或ハ深州の
中ハ躲も岩壁あんどを飛超て山も山ハ逃入
りし時討得し首の中ハ牡丹族の首長の
首級ハ加りしうべ十分の勝あり故ハ兵を
まとめて凱陣せし是より先我ハ陣営ハ来りて
物を賣る者あり頻りハ媚を呈しつる竊るハ陣中の
景況を窺いんとする意姿あり故尙間者ハ在ら
ざるやと人々是ハ眼を着しハ一射牡丹の人種等ハ

耳の形の他ハ異なるや土人の話説ハ所及びハ
渠ガ耳を掩ひし其布のちつもより異なる耳板
露せしうべ儲こそ敵の間者ありぞ搦捕もよど
喚りしその機を速くも推ししん逸足出して
逃行を開処ハ居合ハ兵卒等ハ遁しハせしと
追截ハもど其走る事矢より速く稍一筋の谷
川平地の如く歩渡りして東の方あり山中の
草叢の中ハ分入りつる遠ハ姿を躲ししり元来

蛮兵の敗北の圖



牡丹の土俗等ハ丈高くして手足疲ガ甚
 健康ありのそあどぞ川を涉り断岸を下り險
 走りあどぞ事宛然獸類ハ異らねバ我兵士等
 追付得ざりも理りありと言ふべし然るも此日
 の争戦ハ彼曲者を生捕とせバ之を檢問ハ及
 びハ処果しく嚮ハ我陣ハ間者ハ入り曲者
 仍て首を刎とりとぞ去る十八日以来廿二日
 争迄躬方ハ於ても即死五人手癩十二人ありと

言ハテ憊ても西郷都督
 ハ今回購ハ得る所ハ
 英國の鉄造船を高砂丸と
 号して自づ之ハ上船
 せし既に五月十七日長
 崎を發艦あり同月廿二日
 牡丹人トヨウツリ臺灣ハ着
 戦争の日ヨウツリ臺灣ハ着
 港せし此とき社寮近海

英吉利の測量船一艘及び支那の軍艦二艘碇泊
ありて居りしが、駛て支那の軍艦より士官とも
覺しき者四五輩高砂丸より来て西郷都督に
面會を乞ふ折、都督多忙なる故、他の官員にて
然るべきを申し断りたる處、是非都督と請へるを
以て翌日十二時を約し、廿三日の正午の頃、面
接し及びも支那の使者より我が兵の航海をせし
旨を問ふも、則ち西郷都督より先年此地の

人民等が我漂民を暴殺せし事、箇様々々の訳あり、
問罪の師を向しあり、尤も是等の趣き、去年
全權大使をとり、支那の政府へ談判せし旨、事
恁々と答へしが、件の使者は西郷氏が航海の慰
勞を陳べ辭して本船を返りしが、頓て支那の
軍艦あり我が日章の國旗に向はて祝砲を發せし
つは我ありとも、あつて報砲せし程あり、件の二艘の艦は
此港を退帆せり、斯て西郷都督は許多の兵を

率ちかつて上陸しやうりくし及およびその先まへに着岸ちやくがんせし所の先鋒隊せんぽうたいの陣ぢん々々を點檢てんけんせしむ杯はらしむる更さらに龜山きんざんと言いふ地ちを本營ほんえいと定さだめし稱いふして之これを都督府ととくふといふ介ま介ま程りも土人等とじんらうの十八日の戦せん争そうも彼の牡丹ぼたんの人種じんしゆ等らが一舉いちきよして戦せんひ敗まれ或あるは首くびを失うふあり又または瘡傷さうじやうを負おふ者もの甚おほく尠すくなり既に彼徒かたどの酋長しゆぢやうさへ討うちしつりと听きくあり力ちから大おほい恐怖きふふありしるる西郷都督さいきやうととくが大軍たいぐんを將いて八港はつこう及およびより軍備ぐんびを以もて

十倍じゆじゆして破竹はちやくの如ごとき威勢いせいありしむ何なんれも戦粟せんりよくきん熟蕃じやくばんの徒との言いふもききあり生蕃族せいばんしやくのつらも彼の社寮しゃりやうの酋長しゆぢやうらへ「ミア」あり者ものは就つてして廿四日廿五日廿六日の間あひだに於おて我が陣門ぢんもんに來きりつ降くだを乞こふ者もの數多かずおほあり是こゝに仍なほて都督ととくを始め參軍參謀さんぐんさんまう列席れきぎせしむる降参くださんの酋長等しゆぢやうらうを追おひ呼出よびだして形容けいじやうも武備ぶびの嚴げんありを示しし辞ことばも信義ぎんぎの厚あつきを演あて最懇切さいこんせつに説諭せつごんも及および各感涙あつなみ

のまろむを覺つて積年牡丹人等が為す苛御を
受くる患苦を訴へ實に此擧及びる事天助を
心地をば適す牡丹の巢穴へ進撃せしむ時
至らば嚮導先鋒を願ふと言ふ信實面々顯
嫌疑るるべき所ありければ則ち西郷都督より刀銃
及び緋縮緬の類を咸く與つて慰情を
表せしむるに渠等いよいよ好意を感じて牛
雞もど種々の土産を携へ来りて二心を

射をわめく露つらるとあんな然らば臺灣の地は
炎熱のつとも烈く即今五月の末なると
寒暖計中九十度に至るば七八月の頃もあつた
恐らくは百度をも過る所に至らんう就てハ風土は
慣るる兵士等悩める者も多るべき音聲聞は違
せしむる則ち思食をもて在陣の兵士の為す外國の
医師一名を別段御雇入ありて臺灣の地へ送り下
さし且つ製氷の器械をも同所へ遣はさししるは

歩卒軍夫に至る迄病める者ハ良劑を得熱國に居て
水を喫むる斯の如くの自由を獲るも偏一に聖
恩に浴する所と兵士等何れも感激に堪はざ
暑の中にお在りあぐら此とも怠める氣色あり既に
十八日の一戦に大いなる勝利を得ると雖もいまだ
巢穴を襲はざるを甚ぞ遺憾に思ふをりて急ぎ
進撃に及ばん事を参軍に就て促す事ありつとも
頻りにありしに都督をなめ諸將も種々談

判に及ぶまで此上ハ大舉して彼賊穴を屠らんと
軍議決定に至りしに更六月一日に進撃の期
とありて総勢三千余人の内十九大隊三小隊を
して本營を守らしめ其餘の兵を三手に別ち
中央ハ石門口に進み左軍ハ風港口より攻入り
右軍ハ竹社口より襲ふの軍配頗る調ひつゝ
三道の兵士並びに進んで一撃に巢穴を破らんと
其趣きを終らんとするに事長談に及ぶをりて丹ハ

次の巻に記載を引續きて出版せし

臺灣軍記二編終

春園暢淨書

三府

發兌

堺屋 仁兵衛

河内屋 喜兵衛

湊原屋 茂兵衛

湊原屋 伊八

山城屋 佐兵衛

和泉屋 市兵衛

河内屋 文助

010190518928

